

日本語のディスクレイマーが話し手の印象に与える影響

—否定型と肯定型を比較して—

酒井拓人(愛知学院大学大学院生)

1. 問題

日常で行われる会話は必ずしもうまくいくわけではなく、意味が誤解されたり規範に反した発言であるとみなされたりするなど、話し手にとって問題となる状況 (problematic situation) が生じる場合がある。このような状況において、聞き手は話し手に対してルールや規範を破る人や会話の流れをダメにする人などといったネガティブな評価をする可能性が高まる。この状況を修復 (remediation) するために、「アライメント (alignment)」(Stokes & Hewitt, 1976) と呼ばれる行為を行うが、そのうちの一つにディスクレイマー (disclaimer) がある。

ディスクレイマーとは、「意図された行為の結果として生じる疑いやネガティブな類型化を、前もって避けたり覆したりするために使われる言語的方略」(Hewitt & Stokes, 1975) である。具体的には、「別に怠けてるわけではないんだけど、… (怠惰な発言).」や「変な風に聞こえるのはわかっているんだけど、… (変な発言).」のような前置き表現が該当する。話し手の観点からは、言おうとしている主張をそのまま発言してしまうと、聞き手からルール・規範違反であるとみなされたり自身のアイデンティティに対してネガティブな評価を受けたりすると予想する。そこで、ルールや規範を理解していること、それらに違反する意図はないことをディスクレイマーで表現することで、聞き手によるネガティブな評価を避けようとするのである (Overstreet & Yule, 2001)。

ディスクレイマーが話し手の意図した通りの効果を発揮しているかについて、英語圏において量的に検討した研究が少ないながらもいくつか存在する。しかしながら、ディスクレイマーを用いて発言するとかえって否定的な印象が強まってしまいう可能性が示唆されている (e.g. El-Alayli, Myers, Peterson, & Lystad, 2008; Raird & Jory, 2011)。一方、日本語会話におけるディスクレイマーの効果について検討した酒井 (2019) では、ディスクレイマーを用いると否定的な印象が強まる場合もあったが、反対に印象がポジティブになる場合もあることが示された。この点について本研究では、自己卑下呈示の観点からディスクレイマーを否定型と肯定型に区別して検討を行った。

否定型とは「～ではないんだけど」と自身の発言にネガティブな側面があることを否定する形式で、肯定型は「～なのはわかっているんだけど」と自ら認める形式をとる。この自らネガティブな側面を認めるという点は「他者に対して選択的に自己の否定的な側面を呈示すること」(吉田・浦, 2003) である自己卑下呈示に当てはまるといえるだろう。日本には自己卑下呈示が望ましいという文化があるため、自己卑下呈示が相手にポジティブな印象を与えることが明らかになっている (稲富・山口, 2004)。したがって、自己卑下呈示とみなされる肯定型はディスクレイマーを用いない場合よりも話し手の印象をポジティブにする可能性がある反面、否定型は話し手の印象をよりネガティブにしてしまう可能性があると考えられる。以上の議論から、本研究では以下の仮説の検証を試みた。

仮説 肯定型ディスクレイマーはディスクレイマーを用いない場合よりも話し手の印象をポジティブに、否定型ディスクレイマーはディスクレイマーを用いない場合よりも話し手の印象をネガティブにする。したがって、話し手の印象に関する評定値は、「肯定型>ディスクレイマーなし>否定型」の順でポジティブになる。

2. 方法

実験参加者 中部地方の大学生 308 名のうち、大量の回答漏れがあった 2 名を除いた 306 名 (男性 178 名, 女性 128 名), 平均年齢 19.95 歳 ($SD = 4.34$)

実験実施時期 2019 年 7 月

実験計画 呈示した会話中でのディスクレイマーの形式 (ディスクレイマーなし (統制群) vs 否定型 vs 肯定型) を操作した 1 要因 3 水準実験参加者間計画の質問紙実験であった。

呈示刺激 本実験では 3 つの会話を呈示した。まず、先行研究を参考に筆者が独自に会話文を作成した。次に、社会心理

学を専門とする大学教員と協議を行って修正した会話を複数の協力者に呈示し、会話に不自然さがないかなどフィードバックするよう求めた。得られたフィードバックをもとに再び社会心理学を専門とする大学教員と協議を行い修正したものを呈示刺激とした。会話は2人の登場人物が対話をするものである。実験参加者が主に大学生であることを考慮して、全ての会話の登場人物とある大学生とその友人の学生とした。また、登場人物の性別は実験参加者と同性であることを説明文で教示した。表1に会話の場面と内容、操作した文を示す。ディスクレイマーの形式の操作は、全ての会話において話し手の最後の発話で行った。

手続き 大学の講義時間内に実施した。初めに実験参加が任意であることを伝え、会話を読んで設問に回答するよう教示した後、質問紙を配布した。回答するペースは実験参加者の自由とし、参加者全員の回答終了を確認して回収した。所要時間は15分程度であった。

設問項目 実験参加者は、各会話を読んで以下の設問項目に回答した。

呈示会話をどれだけイメージできたかを問う項目 実験参加者が呈示した会話をどの程度イメージできたかを問う項目である。「まったくイメージできなかった」「少しイメージできた」「ある程度イメージできた」「かなりイメージできた」「とてもよくイメージできた」の5件法で回答を求めた。

話し手の言い方の印象に関する項目 話し手の言い方の印象について問う項目である。呈示会話の内容をふまえ、筆者が社会心理学を専門とする大学教員と協議したうえで、独自に採用した。各会話に対応する項目として、「自慢っぽい-自慢っぽくない」「得意そう-得意そうでない」(以上会話①)、「バカにした-バカにしていない」「生意気である-生意気でない」(以上会話②)、「怠けている-怠けていない」「やる気のない-やる気のある」(以上会話③)、全会話に共通する項目として「感じの悪い-感じのよい」「不適切な-適切な」の計8項目の両極尺度への回答を求めた。各項目は「非常に」「かなり」「やや」「どちらでもない」「やや」「かなり」「非常に」の7件法であった。

話し手に対する総合評価に関する項目 話し手を総合的に評価する項目として、「嫌い-好き」の1項目に回答を求めた。設問項目2と同様の7件法であった。

3. 結果

有効回答数 表2に、各会話における設問項目1に対する回答の人数分布と有効回答数を示す。本項目において、無回答または「まったくイメージできなかった」を選択した実験参加者のデータは、その会話での分析から除外した。

表1. 呈示した会話の内容と刺激文

会話	会話の場面と内容	刺激文の一例
		(強調部分)は否定型群、肯定型群のみ呈示
①	新学期開始時 成績について	自慢じゃないけど。(否定型) 自慢っぽくなっちゃうけど。(肯定型) ほとんどAAでとれたよー。
②	テスト終了後 テストの出来具合について	バカにするわけじゃないけど。(否定型) バカにしてるみたいに聞こえるかもしれないけど。(肯定型) 逆にそれはマズくない?
③	講義の開始前 課題レポートの進捗について	怠けるわけじゃないんだけど。(否定型) 怠けてるみたいに聞こえるのはわかってるけど。(肯定型) まあまだ始めなくても大丈夫でしょ。

表2. 設問項目1における回答の人数分布

	会話①	会話②	会話③
未回答	15 (5%)	31 (10%)	52 (17%)
まったくイメージできなかった	3 (1%)	2 (1%)	0
少しイメージできた	18 (6%)	16 (5%)	18 (6%)
ある程度イメージできた	78 (26%)	85 (28%)	74 (24%)
かなりイメージできた	92 (30%)	86 (28%)	77 (25%)
とてもよくイメージできた	100 (33%)	86 (28%)	85 (28%)
有効回答合計	288	273	254

次に、各会話における話し手の言い方の印象に関する項目および話し手に対する総合評価について、ディスクレイマーの形式を要因とする一要因分散分析ならびに多重比較 (Tukey の HSD 法) を行った結果を示す。

会話① 表3に各群の評定値を示す。全ての項目において群間に有意差は認められなかったが、会話①の対応項目である「得意そう-得意そうでない」において小さな効果 ($\eta^2 > .01$) がみられた。統制群の値が最も高く、次いで肯定型、否定型となった。

表3. 会話①における各群の評定値の平均値

項目	統制(n=95)	否定型(n=97)	肯定型(n=96)	F値(df)	η^2	
	M (SD)	M (SD)	M (SD)			
言い方の 印象	自慢っぽい-自慢っぽくない	3.29 (1.77)	3.16 (1.74)	3.15 (1.60)	F (2,285)= 0.22	.002
	得意そう-得意そうでない	3.16 (1.42)	2.84 (1.14)	3.05 (1.33)	F (2,284)= 1.45	.010
	バカにした-バカにしていない	3.76 (1.47)	3.78 (1.57)	4.05 (1.50)	F (2,284)= 1.12	.008
	生意気である-生意気でない	3.56 (1.44)	3.70 (1.32)	3.84 (1.51)	F (2,285)= 0.96	.007
	怠けている-怠けていない	4.98 (1.47)	4.66 (1.45)	4.66 (1.44)	F (2,285)= 1.55	.011
	やる気のない-やる気のある	4.39 (1.34)	4.10 (1.32)	4.07 (1.18)	F (2,284)= 1.77	.012
	感じの悪い-感じの良い	3.43 (1.39)	3.70 (1.43)	3.59 (1.29)	F (2,285)= 0.94	.007
	不適切な-適切な	3.94 (1.34)	3.89 (1.20)	3.89 (1.28)	F (2,285)= 0.05	.000
総合評価	嫌い-好き	3.68 (1.42)	3.53 (1.43)	3.53 (1.25)	F (2,281)= 0.40	.003

注: 項目得点は、1:「非常に(左側)」-4:「どちらでもない」-7:「非常に(右側)」

†: p < .10, *: p < .05, **: p < .01

会話② 表4に各群の評定値を示す。会話②の対応項目の「生意気である-生意気でない」において有意な群間差と小さな効果が認められた。多重比較の結果、否定型の方が統制群よりも有意に評定値が低く ($p = .026, d = 0.39$), 否定型の方が話し手の言い方をよりネガティブに捉えていたことが明らかになった。肯定型に関しては、有意差は認められなかったものの統制群より評定値が低かった。

表4. 会話②における各群の評定値の平均値

項目	統制($n=94$)	否定型($n=89$)	肯定型($n=90$)	F値(df)	η^2	
	M (SD)	M (SD)	M (SD)			
言い方の 印象	自慢っぽい-自慢っぽくない	3.82 (1.24)	3.91 (1.51)	3.97 (1.45)	$F(2,270) = 0.26$.002
	得意そう-得意そうでない	3.22 (1.27)	3.07 (1.18)	3.42 (1.32)	$F(2,270) = 1.79$.013
	バカにした-バカにしていない	3.87 (1.48)	3.48 (1.60)	3.58 (1.69)	$F(2,270) = 1.50$.011
	生意気である-生意気でない	4.06 (1.20)	3.55 (1.38)	3.67 (1.41)	$F(2,270) = 3.76 *$.027
	怠けている-怠けていない	5.01 (1.14)	5.00 (1.31)	5.23 (1.30)	$F(2,269) = 1.00$.007
	やる気のない-やる気のある	4.86 (1.02)	4.67 (1.25)	4.64 (1.25)	$F(2,268) = 0.95$.007
	感じの悪い-感じの良い	3.78 (1.17)	3.35 (1.27)	3.59 (1.37)	$F(2,270) = 2.60 \dagger$.019
	不適切な-適切な	3.99 (1.10)	3.83 (1.35)	3.96 (1.26)	$F(2,270) = 0.41$.003
総合評価	嫌い-好き	3.70 (1.31)	3.52 (1.28)	3.40 (1.43)	$F(2,267) = 1.19$.009

注: 項目得点は, 1:「非常に(左側)」-4:「どちらでもない」-7:「非常に(右側)」

†: $p < .10$, *: $p < .05$, **: $p < .01$

また、共通項目の「感じの悪い-感じの良い」では有意傾向の群間差と小さな効果が見られ、多重比較の結果、否定型が統制群よりも評定値が低い傾向がみられた ($p = .061, d = 0.35$)。肯定型については、有意差はなかったものの、統制群よりも評定値が低くなっていた。

会話②のもう一つの対応項目である「バカにした-バカにしていない」に関しては、有意差は認められなかったものの小さな効果がみられ、統制群の評定値が否定型と肯定型よりも若干高くなっていた。

会話③ 表5に各群の評定値を示す。会話③の対応項目である「やる気のない-やる気のある」において、有意な群間差と小さな効果が見られた。多重比較の結果、統制群が他2群よりも有意に評定値が低くなっており (vs 否定型 $p = .030, d = 0.39$; vs 肯定型 $p = .040, d = 0.37$)、ディスクレイマーがない場合のほうが話し手の言い方をよりネガティブにとらえていたことが明らかになった。

表5. 会話③における各群の評定値の平均値

項目	統制($n=83$)	否定型($n=84$)	肯定型($n=87$)	F値(df)	η^2	
	M (SD)	M (SD)	M (SD)			
言い方の 印象	自慢っぽい-自慢っぽくない	5.39 (1.17)	5.13 (1.16)	5.02 (1.22)	$F(2,251) = 2.09$.016
	得意そう-得意そうでない	4.99 (1.19)	4.62 (1.22)	4.61 (1.20)	$F(2,251) = 2.70 \dagger$.021
	バカにした-バカにしていない	5.39 (1.25)	4.87 (1.27)	4.47 (1.21)	$F(2,251) = 11.56 **$.084
	生意気である-生意気でない	4.46 (1.31)	4.26 (1.36)	4.15 (1.29)	$F(2,251) = 1.18$.009
	怠けている-怠けていない	2.70 (1.23)	2.79 (1.20)	2.83 (1.19)	$F(2,251) = 0.25$.002
	やる気のない-やる気のある	2.16 (1.08)	2.56 (1.00)	2.54 (0.99)	$F(2,251) = 4.16 *$.032
	感じの悪い-感じの良い	4.40 (1.15)	4.37 (1.02)	4.14 (1.15)	$F(2,251) = 1.42$.011
	不適切な-適切な	3.83 (0.82)	4.18 (0.91)	3.90 (1.14)	$F(2,251) = 3.04 *$.024
総合評価	嫌い-好き	4.52 (1.05)	4.45 (1.09)	4.24 (1.17)	$F(2,249) = 1.45$.012

注: 項目得点は, 1:「非常に(左側)」-4:「どちらでもない」-7:「非常に(右側)」

†: $p < .10$, *: $p < .05$, **: $p < .01$

また、共通項目である「不適切な-適切な」においても有意な群間差と小さな効果量が認められた。多重比較の結果、統制群が否定型よりも有意に評定値が低くなっており ($p = .056, d = 0.40$)、統制群は否定型よりもネガティブに評価したことが明らかになった。また、もう一つの共通項目である「感じの悪い-感じの良い」では有意な群間差は認められなかったものの、小さな効果が見られた。この項目では、肯定型が他2群と比べて評定値が低くなっていた。

総合評価「嫌い-好き」では有意な群間差は認められなかったものの、小さな効果が見られた。肯定型が他2群よりも評定値が低くなっていた。

4. 考察

本研究は、自己卑下呈示の観点からディスクレイマーを否定型と肯定型に区別し、肯定型はディスクレイマーを使わない場合よりも話し手の印象をポジティブに、否定型はディスクレイマーを用いない場合よりも話し手の印象をネガティブにするという仮説を検証した。分析の結果、会話②でディスクレイマーがある場合の方がディスクレイマーがない場合よりもネガティブな評価になる項目が確認されたが、会話③でそれとは反対の結果が確認された。したがって、仮説は完全

な形で支持されなかったと言えるだろう。本研究では、日本語会話におけるディスクレイマーがポジティブな効果を及ぼす要因はディスクレイマーの形式にあるのではないかという観点から検討したが、肯定型ディスクレイマーを使ったからと言って話し手の印象が必ずポジティブになるわけではないということが結果から明らかになった。

ディスクレイマーの形式によって違いが見られなかったという点について、日本語話者と英語話者のディスクレイマー認知の違いが要因の一つとして考えられる。Riard & Jory (2011)は、逸脱行動の帰属スタイルについて、それを状況に帰属しやすいアジア人と個人特性に帰属しやすいアメリカ人の差を挙げ、ディスクレイマーの認知や人物評価に差がみられる可能性があるとして指摘している。具体的には、アジア人はディスクレイマーを含めた文章全体、すなわち文脈を考慮して話し手を評価するが、アメリカ人はディスクレイマーで否定された特性をすぐに人物評価にもちいるのではないかということである。また、同じようなことが「コンテキスト」(Hall, 1976)という概念からも言えるだろう。アメリカなどの低コンテキスト文化はことばに頼ったコミュニケーションが多く、実際に表現された言葉が重要視される。対照的に、日本のような高コンテキスト文化では実際の言葉に頼るコミュニケーションは少なく、共有されている知識や情報、文脈を考慮しやすい。以上のことから、日本語話者(日本人)はディスクレイマーの形式のみを考慮して話し手を評価するのではなく、ディスクレイマーを含めた文章全体や会話の文脈を考慮して話し手を判断するため、話し手がディスクレイマーを用いたからと言って必ずしもネガティブな評価するわけではない可能性が高い。したがって、ディスクレイマーの有無や形式によって話し手の印象評価や総合評価において一貫した結果がみられなかったと考えられる。

また、各会話のどの項目においても1点を超える評定値差は見られず、確認された効果量も小さいものばかりであった。加えて、どの会話においても総合評価項目では有意な差がみられなかった。これらの結果は、ディスクレイマーの有無や形式で差がみられたとしてもそれはわずかであり、ディスクレイマーは話し手に対する総合的な評価にはほとんど影響がないという可能性を示唆している。Bell, Zahn, & Hopper (1984)から示唆されるように、会話の中の1つのディスクレイマー程度では話し手の印象に対して影響力が小さいという可能性も十分考えられる。この点については、次のような条件との比較検討が必要だろう。①呈示会話を短くすることでディスクレイマーを操作する文の会話の中での比重を高める。②呈示会話の中で不自然にならない程度にディスクレイマーを繰り返す。③一文の中で否定型ディスクレイマーと肯定型ディスクレイマーを組み合わせる。

(本論文は、筆者の2019年度愛知学院大学修士論文の一部を修正、再編集したものである。)

参考文献

- Bell, R. A., Zahn, C. J., & Hopper, R. (1984). Disclaiming: A test of two competing views. *Communication Quarterly*, **32**(1), 28-36.
- El-Alayli, A., Myers, C. J., Peterson, T. L., & Lystad, A. L. (2008). "I don't mean to sound arrogant, but..." The effects of using disclaimers on person perception. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **34**(1), 130-143.
- Hall, E. T. (1976). *Beyond Culture*. New York: Anchor Press. (ホール, E. T. 岩田慶治・谷泰(訳) (1979). 文化を越えて TBSブリタニカ.)
- Hewitt, J. P., & Stokes, R. (1975). Disclaimers. *American Sociological Review*, **40**(1), 1-11.
- 稲富 健・山口 裕幸 (2004). 自己卑下呈示が受け手に与える印象: 受け手が認知する呈示者の作為性との関連 九州大学心理学研究, **5**, 201-206.
- Overstreet, M. & Yule, G. (2001). Formulaic disclaimers. *Journal of Pragmatics*, **33**, 45-60.
- Riard, N. N. & Jory, M. (2011). Is it possible to appear less lazy? Disclaimer efficacy in social interaction. *The New School Psychology Bulletin*, **8**(2), 58-69.
- 酒井拓人 (2019). 日本語会話におけるディスクレイマー (disclaimer) の影響 日本社会心理学会第 60 回大会発表論文集, 101.
- Stokes, R., & Hewitt, J. P. (1976). Aligning actions. *American Sociological Review*, **41**(5), 838-849.
- 吉田 綾乃・浦 光博 (2003). 自己卑下呈示を通じた直接的・間接的な適応促進効果の検討 実験社会心理学研究, **42**(2), 120-130.